

研究ノート

日本における「消極化」する若年男性についての一考察

A study of young men who are not competitive in Japan

合 田 美 穂

- 1, はじめに
- 2, 社会学研究の視点からみた「消極化」する若年男性
- 3, 大脳生理学研究の視点からみた「消極化」する若年男性
- 4, 免疫学研究の視点からみた「消極化」する若年男性
- 5, 心理学研究の視点からみた「消極化」する若年男性
- 6, むすびにかえて

1, はじめに

(1) 1人や同性同士で行動することに違和感を感じない若者の増加

日本に関心がある海外の若者と交流を続けている中で、いろいろな質問を受けることがある。最近の質問では、「日本人は集団主義で、1人で行動することを好まない人が多い」とずっと思っていたが、どうもそうではないらしい。実際はどうなんですか。」「日本語の雑誌を見ていたら、よく“女子会”という言葉が出てくるけれども、“男子会”という言葉は無いんですか。」「日本のバレンタインデーでは、女性から男性へのアプローチが定着しているということを知った時には驚きましたが、今、その逆パターンが始まっていると聞きました。本当ですか。」などが印象的である。筆者もまた、その「現象」について、数年前から気になっていた。

実際に、筆者は最近、数名の20～30代の日本人女性から「1人であれこれ考えたりする時間が好きで、1人旅に出かけることもある」、「趣味や興味に熱中していたら、特に他人と過ごしたいと思うこともない。やりたいことも多いし、恋人がどうしてもほしいとも特に思わない。」という話を聞いたり、30代の日本人男性からは、「仕事が充実しているので、恋人をわざわざ作って、彼女と過ごすことに時間をかけたいとまでは強く思わない。周囲にも同じような人が何人もいる。」という話を聞いたりしている。

「女子会」という言葉については、2008年

頃から、テレビ番組や雑誌などのマスメディアで取り上げられるようになり、2010年には「新語・流行語大賞」のトップテンの1つとして選ばれている。「女子会」という言葉が出現する以前から、女性だけで食事や集まりをすることなどは、珍しいことではなかった。しかし、「女子会」という言葉が定着したために、より一層気軽に女性だけで集まれる風潮が強くなったのではないかと考えられる。

一方、市民権を得たといえるほどではないが、「男子会」という言葉も、時々、店の広告やメディアなどでも目にするようになった。「女子会」と「男子会」という言葉の普及は、「異性とよりも、同性同士で集まるのが実際に多い」、「特に異性と交流しなくてもいいという人が増えた」、「同性と集まる方が気楽だと考える人が多い」などといった考えが背景にあることとも関連しているといえるだろう。

バレンタインの「逆チョコ」については、社会学者の山田昌弘氏（中央大学教授）が、近年、女性へのアプローチに対して消極的な男性に、告白の機会を与えるために、「逆チョコ」ブームが起こっていることを指摘している（詳細は後述）。

こういった現象は、10年ほど前まで、海外の若者から描かれていた日本の若者のイメージである「日本人は集団主義」、「(かつてのメディアやトレンドドラマなどからの影響で)合コンが好きで、恋愛関係が華やか」、「(亭主関白のイメージから)男性が強気で、(大和撫子のイメージから)女性あまり自己主張

をしない」とは大きく異なるものである。

(2) 市民権を得た「草食化」という言葉

また、最近、日本の大学で教鞭をとっている複数名の知人との会話の中で、以下のような話も聞いている。「最近、行動においても意識においても消極的、安全志向の学生が増えた。」「特に男子は、より一層、安定志向の傾向があることを感じる。」「学生との雑談の中で、合コンやデートの話題が、以前ほど聞かれなくなった。」「海外留学をしたいと積極的に相談してくる学生が少なくなった。また、相談に来るのはどちらかといえば女子である。」「雑談の中で、車やブランド物といった高価なものに興味があるという話をする学生が減っている。」「自分で起業したり、ベンチャー企業に入ったりするよりも、少々給与が低くても安定した固い組織に入りたいと語る学生が多くなった。」「公務員試験のために、早くから準備を始める学生が増えた。」などである。1つの大学の話ではなく、地域も規模も異なる様々な大学の教員からの話である。筆者が気になったのは、どちらかといえば男子にその傾向があるという点である。

実際に、近年、メディアでは、「草食化」、「草食男子」、「肉食系男子」などの言葉が頻繁にみられるようになってきている。メディアでの取り上げられなど方をみてみると、「草食系男子(草食男子)」という言葉がイメージするものとしては、「女性化して男らしさを失ったように見える若い男性」や「恋愛に積極的ではない男性」などが中心である。

森岡正博氏(早稲田大学教授)の「「草食系男子」の現象学的考察」によると、「草食系男子(草食男子)」という言葉は、2008年から2009年にかけて流行語となり、新聞、テレビ、雑誌、インターネットなどでさかんに取り上げられ、人々の日常会話にもたびたび登場するようになった。2009年12月に、「新語・流行語大賞」のトップ10のひとつとして「草食男子」が選ばれた。2010年になるとこの言葉は普通名詞化している。¹⁾「草食系男子(草食男子)」という言葉に対するイメージには個人差はあるものの、筆者の周囲にいる20

代から30代にかけての日本人の男女では、「草食系男子(草食男子)」という言葉は「聞いたことがない」という人は、ほぼいなかった。

一方で、「草食系女子(草食女子)」という言葉は、あまり耳にすることはない。いわゆる「草食化」という言葉が話題になる場合、「男子」とセットで語られる場合が圧倒的に多いのである。それはなぜだろうか。それをふまえて、筆者は、若い男性の中で、恋愛行動のみならず、一般的な行動や思考において、消極的になる現象が起こっている要因について、このたび、いくつかの視点からの考察を試みることにした。²⁾

また、筆者が「消極化」という言葉を、本研究ノートのタイトルに使用した理由として

-
- 1) 森岡正博「「草食系男子」の現象学的考察」、*The Review of Life Studies*. 2011, p.13. (<http://hdl.handle.net/10466/11851>) (2015年5月4日閲覧)
 - 2) 過去に出版された「草食系男子」に特化して書かれた主な書籍は、社会科学系によるものが多い、(出版年月順)：
 深澤真紀『草食男子時代』、光文社、2009年7月。
 森岡正博『草食系男子の恋愛学』、メディアファクトリー、2008年7月。
 牛窪恵『草食系男子「お嬢マン」が日本を変える』、講談社、2008年11月。
 桜木ピロコ『肉食系女子の恋愛学 彼女たちはいかに草食系男子を食いまくるのか』、徳間書店、2009年3月。
 アルティシア『草食系男子に恋すれば』、メディアファクトリー、2009年5月。
 牛窪恵『草食系男子の取扱説明書』、ビジネス社、2009年6月。
 森岡正博『最後の恋は草食系男子が持つてくる』、マガジンハウス、2009年7月。
 山岸 俊男、メアリー・C・プリントン共著『リスクに背を向ける日本人』、講談社、2010年。(該書は、若者の草食化に特化して書かれたものではないが、草食化を生む背景を理解するためには有用な本であるといえる。)
 牟田武生『現代型うつ病予備軍「滅公奉私」な人々へ蔓延する「めんどくさい・かったるい症候群」の深刻』、ワニブックス、2012年。(該書も、若者の草食化に特化して書かれたものではないが、「学校に行くこと」「簡単な仕事」「友達づきあい」「恋愛」などといったことに関心が持たなくなっている若者について述べられた本である。)
 以下のものは、医学的な視点で「草食系男子」を論じたものである：
 池岡清光他「草食系男子のホルモン動態」、『日本医事新報』4659号、日本医事新報社、2013年8月。

は、若年男性が、「恋愛」に対してだけではなく、「就職」の選択、「旅行」の選択、「購買」行動、「海外」志向に対して、リスクを負うことを避け、消極的な選択をするということから、「草食化」よりも「消極化」というキーワードを使用する方が、しっくりくると考えたからである。また、本研究ノートにおいて、若年男性の「消極化」によって社会にとってマイナスの影響が出るとするならば、どのように改善策を考えていけばいいのかという提言につなげようと試みた。

なお、本研究ノートは、若年男性が実際に「消極化」しているのかどうかを検証したもののでも、その実態を調査したものでもない。「若年男性が、行動や思考において、“消極化”する傾向がある」という前提のもとで、その要因として考えられるものを、各方面から考察することを試みたものである。

2. 社会学研究の視点からみた「消極化」する若年男性

(1) 海外旅行の変化

社会学者の山田昌弘氏は、著書『なぜ日本は若者に冷酷なのか』、東洋経済新報社、2013年)の中で、若年男性の「消極性」現象をいくつか紹介している。山田氏は、ガイドブック『地球の歩き方』(ダイヤモンド社)の現在の読者層の中心が、「中高年男性」と「若年女性」に移り、本来のターゲットであった「若年男性層」には売れなくなっているという現象を紹介している。また、この現象に関連させて、国土交通省の『観光白書』から、男性の出国率を紹介している。それによると、1997年の場合、20代の海外旅行者の出国率(人

口に対する出国者の割合)は21.4%だったのが、2007年には19.4%まで低下している。00年と07年を比較すれば、全男性の出国率は07年の方が高いものの、20代の場合は減少しているというのである。^{3) 4)}

筆者が教鞭をとる香港中文大学でも、日本からの正規の留学生、および、期間限定の交換留学生はともに、男子学生の方が女子学生に比べて少数である(正確な数字を把握していないが、男性は3割ほどである)という印象を持っている。この点だけを見ても、男子学生の海外志向は、女子学生よりも低いと考えられる。

別の調査でも、類似する結果が出ている。(株)JTB総合研究所の「旅行者・消費者行動」に関する調査によると、2003年には男性(前年比16.6%減)、女性(同23.2%減)ともに大きく出国者数が減少したのに対して、2009年は男性だけが減って(同9.7%減)、女性は5.0%も前年を上回っているという。さらに特徴的な傾向を挙げると、男性のなかでも30代から50代の出国者数がとりわけ大きく減っているのである。

このような男女差が生み出された要因として、該研究所の磯貝政広氏は、新型インフルエンザなどの流行が、企業や団体に出張自粛を促した結果、男性の出国者数だけが減ることになったという要因を示唆している。⁵⁾ また、該研究所が、2013年の日本人海外旅行マーケットの実態をまとめた「JTB REPORT2014 日本人海外旅行のすべて」によると、2013年には、円安の影響を受けて、海外旅行者数が激減していることが示されている。⁶⁾

上述の(株)JTB総合研究所による2つの調査結果に対する分析を考え合わせると、男性の出国率が低下した要因として、「消極化」も一因ではあるとは考えられるとはいえ、「消極化」だけを強調することはできないだろう。

3) 山田昌弘『なぜ日本は若者に冷酷なのか』、東洋経済新報社、2013年、156頁。

4) 精神科医で大学で教鞭をとる香山リカ氏は、男女の意識差については述べてないが、海外旅行に対する大学生の意識を、著書『〈不安な時代〉の精神病理』、講談社、2011年)で述べている。香山氏は、折に触れて大学生4年生に卒業旅行の行き先をきくことにしているそうだが、近年、海外旅行を計画しているのは50名中数名のみで、しかもアジアなどの近場への「グループ旅行」ばかりであるという。(香山リカ『〈不安な時代〉の精神病理』(電子版)、講談社、2011年。)

5) (株)JTB総合研究所「減少する日本人海外旅行者・・・変化しつつある海外旅行の動機やその価値観-JTBレポート2010年版の発行に際して-」:
<http://www.tourism.jp/column-opinion/2010/07/jtb-report/> (2015年5月4日閲覧)

6) 同上

JTB総合研究所の磯貝氏は、2010年からみて、最近5年間で有効な旅券を所有する人が、ほぼ400万人減少したという事実を踏まえながら、それらの要因を検証するための有力なデータが現在存在せず、要因を検証するためのデータを見つける必要性があることを提言している。

(2) 男女交際の変化

社会学者の山田昌弘氏が、過去に日本の若年男性への聞き取りを実施した際に、「恋愛感情を持つ相手に交際を申し込んでも、断られることのリスクを考えると、なかなか行動に移せない」という理由から、最初から断れることへのリスク回避をしてしまう人が何人もいたという。「恋人がいない今の状況のままでも構わない」、「恋愛は面倒だ」、「最初からそんなリスクを負うことへのパワーを使いたくない」などといった理由から、交際に対する努力をしない人、そもそも異性への関心さえもない男性さえもいるそうである。⁷⁾

山田氏は、著書『なぜ日本は若者に冷酷なのか』、東洋経済新報社、2013年)において、「バレンタインデー」という興味深い視点から、男性の「消極化」を説明している。日本のバレンタインデーは、チョコレート・メーカーの仕掛けによって、女性が好きな男性に告白するためにチョコレートを贈る日として、1970年代に定着したとされている。日本のバレンタインデーの本来の主旨は、「女性は消極的でなかなか自分から言い出せない」という前提のため、特別な日を作って、女性からも積極的に自分の気持ちを男性に伝えるようにするというものである。しかしながら、近年、「消極的でなかなか自分から言い出せない男性が増えた」という背景から、「逆チョコ」ブームが起きているというのである。

山田氏は、同時にいくつかの論述や数字を紹介して、男女の交際意欲の低下傾向を説明している。1つ目の傾向は、「記事に取り上げ

られている内容の変化」についてである。谷本菜穂氏(『恋愛の社会学』、蒼弓社、2008年)によると、1980年代までは、男性に「積極的な告白」を勧める記事が多かったのが、バブル崩壊後の90年代以降、「さりげなく好意を示す」といったアドバイスに代わっているという。その理由は、断られるという体験を避けるためであるという。⁸⁾

2つ目の傾向は、2010年に実施された、国立社会保障・人口問題研究所の「第14回出生動基本調査」の数字である。未婚者の中で交際している異性(その異性には友人も含まれる)がいない人(18～34歳)は、男性61.4%、女性49.5%と、1987年以降最高となっている。また、恋人(婚約者を含む)のいる人はさらに少なく、男性24.6%、女性30.4%ということであった。同調査では、交際相手がいない18～19歳に対して、異性との交際を望むかどうかを聞いたところ、「交際を望まない」男性は全体の34.7%、女性は33.0%であった。

更に、文中では、日本性教育協会の調査結果も示されており、「異性に興味・感心が無い」高校生、中学生も増大していることが示されている。また、日本性教育協会による2012年の調査結果では、性体験率が、大学男子の53.7%、大学女子の46.0%、高校男子の14.6%、高校女子の22.5%と、男女ともに大幅に低下していることが示されている。⁹⁾

別の調査でも、似たような結果が出ている。毎日新聞(2015年02月04日 東京夕刊掲載)によると、結婚情報サービス大手「オーネット」が2015年1月に公表した新成人600人を対象にした調査では、「交際経験がゼロ」は47.8%(男50%、女45.7%)であり、「片思いを含む恋愛経験がゼロ」は19%(男16.7%、女21.3%という結果)という結果となっている。¹⁰⁾

山田氏は、そういった現象の要因について、

⁷⁾ 筆者は、香港中文大学において、中央大学教授の山田昌弘氏から話を聞く機会を得ることができた。聞き取りを実施した日時は、2014年8月26日、2015年3月2日、同年3月10日である。

⁸⁾ 山田昌弘『なぜ日本は若者に冷酷なのか』、東洋経済新報社、2013年、156頁。

⁹⁾ 山田昌弘『なぜ若者は保守化したのか 希望を奪い続ける日本社会の真実』、朝日新聞出版、2015年、99頁。

以下のように解釈している。1つ目は、「二極化」説である。男女交際が若年化しているため、「もてる人」と「もてない人」の格差が大きくなっているとのことである。2つ目の説は、「バーチャル・リアリティ」説である。パソコンやネットなどの2次元空間、メイド・カフェやアイドルなどのイメージ空間、そして、風俗産業などで、男女関係の欲求が充足されてしまい、現実の異性と付き合う欲求がなくなってしまうという説である。

3、大脳生理学研究の視点からみた「消極化」する若年男性

(1) 生活習慣の変化による若年男性の前頭葉機能の劣化

大脳生理学研究に長年携わってきた大島清氏（京都大学名誉教授）は、著書『できる女とダメな男の脳習慣』、角川書店、2007年）の中で、「若者、特に若い男性の脳は危機的な状況にある」ということを10年ほど前から危惧していることを強調している。最近の若者、特に男性が、「前頭葉」機能が劣化してきており、「前頭葉」のソフトの性能ががんばしくなく、「脳力」（様々な能力）低下の傾向が著しくなっていると警笛を鳴らしている。¹¹⁾

大島氏によると、もともと男性の脳は、女性の脳に比べて、構造的にもろくて壊れやすくできており、このもろい脳を持った男性の「前頭葉」が劣化すると、仕事でも「脳力」が低下するだけではなく、日常生活でも、例えば女性に愛をささやいたりするような、胸がわくわくするような体験が乏しくなり、味気ない毎日を送るようになるという。

大脳は、動物の時代からあった「大脳辺縁系」と、ヒトの脳を巨大化させた主役である「大脳新皮質」に分けられ、後者はさらに、「前頭葉」、「頭頂葉」、「後頭葉」、「側頭葉」に分け

られる。「前頭葉」は脳全体の32.8%を占め、その中に位置する「前頭連合野（前頭前野）」を、大島氏は「脳のソフトウェア」と呼んでいる。

この「脳のソフトウェア」である「前頭連合野（前頭前野）」で行われているのが、「意思」、「思考」、「計画」、「判断」、「創造」といった精神活動である。性的に興奮したり、性行動を起こしたりするように命令するのも、「前頭連合野（前頭前野）」であるとされている。（一方で、本能だけで生殖活動を行う動物の場合は、より原始的な脳である「視床下部」からの影響を受けている。）¹²⁾

若い男性の「前頭葉」のソフト機能が劣化していく原因は、脳をトレーニングする生活習慣から遠のいているからであると、大島氏は説明している。「脳力」低下を防止するためには、積極的に脳を使う脳のトレーニングが重要であるが、最近の若者は、脳のトレーニングとは真逆の生活スタイルを送っており、それが、「前頭葉」の活動に大きな影響を及ぼしているというのである。

例えば、朝はギリギリまで寝て、朝食も取らずに家を飛び出す。外ではあまり体を動かさず、家ではインターネットやゲームをして夜更かしをする。徒歩に頼らず、マイカーや交通機関を頻繁に利用する。全身を使った掃き掃除をせずに機械にさせる。ペンを手に取って長い文章を書くことが少ない。ベッドの使用で、布団の上げ下ろしをすることがない。知りたいことを図書館や資料館に行って調べなくても、インターネットで容易に検索できる。咀嚼しなくてもいいファスト・フードばかりを食べるために顎が鍛えられない、などがあげられる。

無駄な労力を増やす必要がなくなったことは、一概に悪いことだということとはできない。とりわけ、高齢者、身障者、交通の不便な場所に居住している人にとっては、電化製品やインターネットなどの普及により、色々な作業が従来よりも簡単にできるようになり、食事でも手軽にとれるようになったことは、良い

¹⁰⁾ 「恋愛に無関心」って本音？、『毎日新聞』（2015年02月04日東京夕刊掲載）：<http://mainichi.jp/shimen/news/20150204dde012040002000c.html>（2015年5月4日閲覧）

¹¹⁾ 大島清『できる女とダメな男の脳習慣』、角川書店、2007年、17－18頁。

¹²⁾ 前掲書、30頁。

意味での変化であろう。多忙な人にとっても、手間が省けることによって、効率よく作業をすることができるようになった。健康な若者も、同様にそういった恩恵を受けて、楽な生活を享受するようになっているのである。

薬学博士の生田哲氏も、著書『食べ物を変えれば脳が変わる』、PHP研究所、2008年)の中で、近年の「生活習慣の変化」、「食べ物の変化」が脳への悪影響を及ぼしていると述べている。特に、近年摂取が急増している一部の成分の、若年層への脳への影響は、大人の脳への影響よりもダイレクトで大きいと述べている。¹³⁾ こういった「生活習慣の変化」による脳の活動の低下が、若者の「消極化」と無関係であることは否定できない。

(2) 生活習慣の変化による「オキシントン」と「セロトニン」への影響

脳生理学者である有田秀穂氏（東邦大学教授）は、著書『「脳の疲れ」がとれる生活術』、PHP研究所、2012年)の中で、脳の疲れを癒し、気分を安定させ、人に対する信頼感が増すことにつながる「オキシントン」というホルモンの重要性について言及している。その「オキシントン」ホルモンと密接な関係にあるのが、「セロトニン」神経である。

「セロトニン」神経とは、「セロトニン」という物質を合成する神経のことであり、神経の情報伝達に「セロトニン」が利用されている。この「セロトニン」神経が弱ると、神経の情報伝達がうまくいけなくなり、元気がなくなり、「うつ状態」のようになるという。基本的な生命活動にある、「歩行」、「咀嚼」、「呼吸」といったリズム運動は、「セロトニン」神経を興奮させ、それによって、大脳皮質の活動レベルが変わり、爽快な心身の状態が作られるということを著書の中で解説している。¹⁴⁾

一方、「オキシントン」とは、母親が出産し、赤ん坊を育てることに直結したホルモンとし

て以前から知られていたが、近年、母親だけが出すものではなく、年齢、性別、既婚未婚に関係なく、誰にでも分泌されることがわかってきた。「母から子への愛情」だけではなく、「人間同士の信頼」、「男女の愛情」といった「心の状態」を作り出すホルモンでもある。近年注目されている「オキシトシン」の効果には、「人への親近感や信頼感」、「ストレス解消による幸福感」、「血圧上昇の抑制」、「心臓機能の強化」、「長寿」などがあげられている。

脳の「セロトニン」神経の活性化によって、ストレスを受け流すことができ、安定した心理状態を保つことができるようになる。更に、「オキシトシン」が十分に分泌されていると、「セロトニン」神経に影響を与え、「セロトニン」神経も活性化される。両者は密接な関係を保っているのである。また、それらに相関することとして、早寝の習慣によって、睡眠ホルモンである「メラトニン」の分泌をよくすることが大切であると、有田氏は述べている。¹⁵⁾

現代人、特に若者の生活習慣は、「安定した心理状態」を保つことに反する生活習慣であるといえるのではないか。「安定した心理状態」を保つことができる生活習慣とは、睡眠ホルモンの「メラトニン」の分泌をよくすると言われる習慣（例えば、「夜は12時までに眠る」、「夕食後はパソコンを操作しない」、「夜は携帯電話で長話をしない」、「ベッドの近くに携帯電話を置かない」）、および、「セロトニン」神経を活性化すると言われる習慣（「朝日を浴びる（朝型生活）」、「ウォーキングなどの運動を30分以上する」）である。¹⁶⁾ こういった生活習慣を保っている若者は、一体、どれだけいるのであろうか。

また、「家族団らんの機会」、「緊密な人間関係」、「夫婦や恋人との触れ合い」といった状況が、日常的に減少すればするほど、「オキシントン」は分泌されず、「セロトニン神経」が活性化されにくくなる。その上に、夜型

¹³⁾ 生田哲『食べ物を変えれば脳が変わる』、PHP研究所、2008年、208頁。

¹⁴⁾ 有田秀穂『セロトニン欠乏脳 キレる脳・鬱の脳をきたえ直す』、日本放送出版協会、2003年、45-53頁。

¹⁵⁾ 有田秀穂『「脳の疲れ」がとれる生活術』（電子版）、PHP研究所、2012年。

¹⁶⁾ 前掲書。

のパソコン生活で、「メラトニン」の分泌や「セロトニン神経」の活性化を促すことは程遠い生活をしていると、ますます、「人間関係が希薄」になっていき、異性と触れ合いたいという感情も起こらなくなる。こういった「悪循環」が、若者の「消極化」を加速することにつながっていると考えられるのではなからうか。

(3) ゲームによる脳への影響

心療内科医の星野仁彦氏（福島学院大学大学院教授）は、著書（『『空気が読めない』という病』、KKベストセラーズ、2011年）の中で、ゲームやネットへの依存が、脳に悪影響をもたらすことや、「ゲーム脳」の人に脳の前頭葉の機能低下がみられるということを述べている。

星野氏は、著書において、日本大学文理学部の森昭雄教授の興味深い研究を引用している。一般の人の脳では「β波」の方がより優勢で、認知症の人の脳では「α波」のほうが優勢である。森教授の研究によると、小学校のころから1日に2～7時間ゲームに没頭していた大学生の脳を調べたところ、「α波」が「β波」より優勢であったという。つまり、ゲーム脳の特徴として、言葉によるコミュニケーションが乏しくなり、創造性と学習能力が低下してしまうというのである。¹⁷⁾

脳生理学者の有田秀穂氏もまた、著書（『セロトニン欠乏脳 キレる脳・鬱の脳をきたえ直す』、日本放送出版協会、2003年）の中で、上述の森昭雄教授の「ゲーム脳」に関する研究結果を示している。週4日以上、数時間、ゲーム漬けの生活を何年も送った子どもや若者に、日常生活における無気力、ひきこもり、キレやすいという症状が出たという例を挙げて、過度のゲームの危険性を強調している。

「前頭連合野（前頭前野）」と「セロトニン」神経との間には密接な関係があり、家に閉じこもって、何時間もゲーム漬けの生活をする、と、「前頭連合野（前頭前野）」の働きが低下

するだけではなく、確実に「セロトニン」も弱っていく。引きこもりによって、「セロトニン」神経が弱り、その弱った「セロトニン」神経によって、他者とのコミュニケーション障害が出現したとしても、バーチャルの世界で遊んでいる限りは、現実の社会生活とのギャップが解消することはない。むしろ、「セロトニン」神経が弱り、他者とのコミュニケーションをとることに障害が出ると、ますますバーチャルの世界にのめりこんでいくと考えられるのである。そういった「悪循環」に対して、有田氏は警笛を鳴らしている。¹⁸⁾

(4) 「二極化」の加速の一因として考えられる「脳力」の低下

男性の場合は、常にトレーニングをしていないと、「前頭葉」の働きが女性よりも鈍化しやすく、「脳力」も低下しやすいとして、脳生理学者の大島氏は、特に男性に対して、注意喚起をしている。

「前頭葉」の働きが鈍くなり、「脳力」が低下している男性は、創造力が豊かではなかったり、ファッションセンスやユーモアにも乏しかったりする人が多いという。それゆえに、女性から恋愛対象として見られる機会が少なくなり、「もてない人」となってしまう。そして、ますます「自分のもてない」と思いこみ、恋愛から遠ざかるという「悪循環」が生じていると説明している。

大島氏と同様に、社会学者の山田氏も、具体的な数字を提示しながら、若年男性の「二極化」について強調している。日本性教育協会が実施した「青少年の性行動全国調査」（2005年～2006年の実施）によると、例えば、大学4年生の男子の場合、1999年と2005年を比較した場合、性体験の未体験者は1割（1999年）から3割（2005年）に増加している。そして、体験相手1人～2人は6割（1999年）から3割（2005年）に半減している。そして、体験相手3人以上は2割（1999年）から4割（2005

¹⁷⁾ 星野仁彦『『空気が読めない』という病』、KKベストセラーズ、2011年、135頁。

¹⁸⁾ 森昭雄『ゲーム脳の恐怖』、日本放送出版協会、2002年。有田秀穂『セロトニン欠乏脳 キレる脳・鬱の脳をきたえ直す』、日本放送出版協会、2003年、15-23頁。

年)に倍増している。つまり、「未経験」、ならびに「相手が3人以上」に増加がみられるのである。

この現象について、山田氏は、男子大学生間で格差拡大が起き、「もてない人」はますますもてず、「もてる人」はますますもてるという「二極化」が起こっていると分析している。そして、「もてない人」は、ますます消極的になり、そのうちに、男女交際自体をあきらめることになる結論付けている。¹⁹⁾「もてない人」と「もてる人」の格差は、今後も大きくなっていくであろうと考えられる。特に、「もてない人」が悪循環となっている現象と、「脳力」の低下は無関係とはいえないと筆者は考えている。

4、免疫学研究の視点からみた「消極化」する若年男性

免疫学の観点からも、若年男性の「消極化」の背景について考察することができる。免疫学者の安保徹氏(新潟大学大学院教授)は、著書『人がガンになるたった2つの条件』、講談社、2012年)において、「解糖系」と「ミトコンドリア系」という、人間の全身の60兆の細胞内のエネルギー製造のシステムについて、以下のような論を展開している。

まず、「解糖系」とは、食べ物から得られる栄養をエネルギーに変換するシステムであり、「ミトコンドリア系」は、「解糖系」で分解された栄養素などに加え、呼吸によって得られた酸素など、他の多くの要素も関わっているものである。

「解糖系」についていえば、核を持っていない細菌の様な原核生物の多くは、酸素を必要としないため、「解糖系」だけで分裂、増殖を繰り返すことが可能であり、「低酸素」、「低体温」でも適応できる。生殖細胞の1つである精子は、「低酸素」、「低体温」の状態で活性化し、分裂を繰り返すのである。つまり、男性の場合は、寒いからと言って厚着ばかり

していると、体が蒸れて、精子の分裂が抑えられることになるというのである。近年、問題視されている男性の精子の減少は、「ダイオキシン」のような環境ホルモンの影響ばかりではなく、温かい場所でぬくぬくと過ごすようになった生活習慣にも関係があるのではないかと、安保氏は指摘している。

一方、「ミトコンドリア系」は、細胞内に核を持った真核生物(動物、植物、真菌類など)だけであり、女性の卵子とも関係しているため、温めることが絶対条件となっている。安保氏は、合わせて「ミトコンドリア系」の働きを活発にするためには、「体を温める」、「長時間労働を減らす」、「ゆったり呼吸する」ということが有効であるとしている。²⁰⁾

精子と卵子の結合(生殖)は、実は、20年億年前の「解糖系」生命体と「ミトコンドリア系」生命体の合体のやり直しであるという前提の下で、こうした生命の仕組みをふまえると、「解糖系」は男性的で、「ミトコンドリア系」は女性的であるということができると、安保氏は述べている。従来の社会では、「解糖系」優位の男性は、社会に出て、エネルギーに働くことに適しており(ただし、無酸素が基本なので、どうしても体を酷使してしまい、ストレス過多になりやすい)、「ミトコンドリア系」優位の女性は、酸素をとりこみ温めることが基本なので、家庭内またはオフィス内での仕事に向いているとされてきたのも理解できる。

男性が「消極化」する、つまり、男性がエネルギーに動くことをしなくなることによって、本来の「解糖系」の特性を生かすことができなくなり、精子の減少を引き起こし、それによってますます「消極化」が加速するという「悪循環」が、免疫学の視点からも説明することができるのではないだろうか。

一方、免疫とは直接関係がない話ではあるが、「草食系男子のホルモン動態」が医療機関によって報告されている。この報告は、「草食系男子」と考えられる平均年齢30.8歳の男性

¹⁹⁾ 山田昌弘『なぜ若者は保守化したのか 希望を奪い続ける日本社会の真実』、朝日新聞出版、2015年、97-99頁。

²⁰⁾ 安保徹『人がガンになるたった2つの条件』(電子版)、講談社、2012年。

21名に対して、ホルモン値、体組成などを計測したものであるが、そこでは、「草食系男子は男性ホルモン値が低い」という印象を裏づける結果がみられた。²¹⁾

「草食系」と呼ばれている男性は、「思考形態」、「行動形態」などが「草食化」していると、一般的にいわれているが、それだけではなく、この報告では、実際に「男性ホルモン値」も低いということが検証されているのである。「消極化」や「草食化」についての議論する際には、今後、こういった医学的な検査結果や医学的な分析も、十分に考慮する必要がある。

5. 心理学研究の視点からみた「消極化」する若年男性

(1) 幼少時からの「コミュニケーション欠如」の影響

心理学者の加藤諦三氏は、著書『非社会性の心理学』、角川書店、2009年)で、「現在の日本の若者は、自然な感情や共通感覚を失いつつある」という現象を憂慮している。その要因として、幼少時からのコミュニケーションの欠如が、他人と社会性を構築するための、コミュニケーション能力の発達を阻害させてきたからであるとしている。²²⁾ 幼少時からのコミュニケーションが欠如している人は、他人と良い関係を構築できなかった時のダメージを恐れて、ますます他人とコミュニケーションを積極的にとろうという気持ちになれない、という「悪循環」となっているのではないかと考えられる。

社会学者の山田昌弘氏もまた、ベネッセ教育研究開発センターが実施した「第1回子ども生活実態基本調査報告書」の調査結果を紹介している。そこでは、「親と会話をする子どもの方が成績がよい」、「とりわけ、父親と社会の出来事やニュースについて会話している子どもは成績がよい」という調査結果が示されている。「子どもの成績と、親の社会意識

に関連がある」と仮定し、「社会意識を持たない親、そういった会話をしない親に対する何らかの対策が必要である」と山田氏は述べている。²³⁾ この調査結果も、幼少時のコミュニケーションの重要性を示す1つの事例であるといえる。

また、幼少時からのコミュニケーションの有無があるかどうかの関連性の明記はないが、興味深い別の調査結果を以下に紹介する。(株)JTB総合研究所による、「若者の生活と旅行意識調査」²⁴⁾ (2012年)である。その調査は、「ゆとり世代」²⁵⁾ (19～25歳)および「プレゆとり世代」(26歳～33歳)に対して、「人生で大切にしたいこと(1位～3位まで選択)」を回答させたものである。

調査の結果、「ゆとり世代」が人生で重視するものでは、「趣味や興味の追及」(16%)と「家族」(16%)が同率の1位となり、3位は「平凡でも安定した生活を送れること」(13%)であった。「プレゆとり世代」の場合は、「健康で一生暮らせること」(21%)が1位となり、「家族」(14%)が2位となり、「平凡でも安定した生活を送れること」(12%)が3位となっている。選択肢の中には、他に、「お金持ちになること」、「よい友人たちとよい人間関係を築くこと」、「結婚をすること」、「海外で暮らすなど日本を超えた世界を体験すること」なども含まれていたが、それらは上位にランキングしなかった。

この調査結果では、若者(ここでは「ゆと

23) ベネッセ教育研究開発センター「第1回子ども生活実態基本調査報告書」、『研究書報』vol.33、2005年。山田昌弘『なぜ若者は保守化したのか 希望を奪い続ける日本社会の真実』、朝日新聞出版、2015年、205-206頁。

24) (株)JTB総合研究所「若者の生活と旅行意識調査」：http://www.tourism.jp/wp/wp-content/uploads/2012/12/research_121212_youth.pdf (2015年5月4日閲覧)

25) 一般的に、ゆとり世代は以下の定義で範囲が区切られる：広義では、小中学校において2002年度以降、高等学校において2003年度入学生以降に施行された学習指導要領で育った世代(1987年4月2日-2004年4月1日生まれ)。狭義では、これらの世代のうち、一定の共通した特徴をもつとされる世代(1987年4月2日 - 1996年4月1日生まれ)。

21) 池岡清光他「草食系男子のホルモン動態」『日本医事新報』4659号、日本医事新報社、2013年8月。

22) 加藤諦三『非社会性の心理学』(電子版)、角川書店、2009年。

り世代」と「プレゆとり世代」)は、「人間関係の構築」、「結婚」、「海外体験」に対しては、比較的「消極的」であることが示唆されている。特に、「社会性」と深く関係している「人間関係の構築」および「結婚」といった「社会性」の行動を最も重視しないということと、「コミュニケーション欠如」という背景に関連性があるものかどうかについて、今後、更なる検証を期待したいところである。

(2) 和田氏による「メランコ人間」と「シゾフレ人間」の分類

長年、精神医学、精神分析学に携わり、若者ウォッチングや若者の調査を行ってきた精神科医の和田秀樹氏は、著書『「人を動かす」心理学』、毎日新聞社、2013年)の中で、「人間は大きく2つのパーソナリティに分けられる」という興味深い論を展開している。²⁶⁾

原因が不明の精神疾患は、「内因性精神病」と呼ばれているが、2大「内因性疾患」が、「統合失調症(英語でschizophrenia)」と「躁うつ病(正式名称は気分障害、英語でmelancholy)」である。和田氏は、「正常人でも、心の世界がそのどちらかに向いており、それによって人間のパーソナリティが分けられるはずだ」と仮定している。そして、正常範囲のものとして、前者を「シゾフレ人間」、後者を「メランコ人間」と呼んでいる。

和田氏によると、前者の「統合失調型人間」である「シゾフレ人間」は、「自分の意思よりみんなにどう思われるかの方を気にする」といい、「自分の好みよりも周囲に合わせる」ということや、「1人頑張って目立つより、みんなと同じくらいの成績でいることに安心を感じる」というタイプである。彼らは、自分より周囲が気になるので、自分だけ目立つことを避け、リスクを冒してまで、色々なことに挑戦するよりも、常に安全な選択をするタイプである。このタイプの人たちは、他力本願の傾向が強く、悪いことがあると、人のせいにしたたり、運や出会いのなさを嘆いたりする

という。

一方、後者の「躁うつ型人間」である「メランコ人間」は、「自分が頑張ってもダメなら、自分が悪い」と落ち込み、ひどい時には自分を責めすぎてうつになってしまう人もいう。高度経済成長期の競争社会だった時代の日本では、「メランコ人間」が主役で、自分のために頑張り続け、受験戦争や出世競争を勝ち抜いてきたという。自分にこだわるために、競争を好み、周囲の目よりも自分の意思を大切にするために、批判されても頑張り続けるという態度が、日本の戦後復興、高度成長を支えてきたのかもしれないと、和田氏は推測している。

和田氏は、近年、若者たちの「シゾフレ人間」化が目立ってきていると強調している。和田氏は、90年代以降の、「音楽のメガヒット現象」と「子どもたちの学力低下」によって、「若者のシゾフレ化」を説明している。その2つの現象の共通点は、周囲の目を気にするために、「みんなと同じ」でいることが心の大きなテーマとなっていることであるという。1つのヒット曲やヒット商品が生まれると、みんなそれに飛びつく。学力低下について言えば、若者の「みんなと同じ」という心理が作用している可能性が高いという。自分よりも、周囲の目や周囲の嗜好が、音楽の好み、ファッション、生きる方向性まで決めてしまうのである。

また、「シゾフレ人間」の対人関係パターンで言えば、不特定多数の出席するパーティなどを好むが、特定の他者と飲み明かす二次会は好まず、カラオケに行っても、あまり本音を見せようとせず、歌の間に親密な会話もせず、黙々をカラオケのカatalogを見ながら次に歌う歌を探すタイプであるという。その一方で、「メランコ人間」は、情的で深い人間関係を求める。本音丸出しで飲み明かすというのが人間関係のパターンであり、親友などを決めてしまうと、それに対してきわめて献身的で忠実であるとしている。和田氏は、前者の「シゾフレ人間」が現在の若者に多いと感じている。

²⁶⁾ 和田秀樹『「人を動かす」心理学』(電子版)、毎日新聞社、2013年。

(3)「消費せず」に「みせびらかすことを楽しむ」若者

精神科医の香山リカ氏は、著書（『〈不安な時代〉の精神病理』、講談社、2011年）において、「出費をしたがらない若者」現象にからめて、松田久一著『「嫌消費」世代の研究』（東洋経済新報社、2009年）から、興味深い話を紹介している。それによると、「ポスト・バブル期」の若者の消費の基本は、他人まかせの「他者依存マインド」であるという。中でも、特徴的なのは、「とにかく流行っているもの、他人が持っているものが欲しい」という「バンドワゴン消費」、そして、他人をうらやましがらせるための「みせびらかし消費」である。「他人がどう思っているか」、「みせびらかして、他人にどう思われるか」が気になるあまり、彼らの消費マインドは萎縮し、消費に対するモチベーションが落ちるというのである。²⁷⁾

財団法人・地域流通経済研究所が、2010年に実施した「若者のライフスタイルと消費行動～若者は本当にお金を使わないのか！？～」というタイトルの調査では、1976年～1985年生まれの23歳～32歳の社会人の男女を「若者」と定義して、「団塊ジュニア（1971年～1975年生まれの33歳～37歳）」および「アラフォー（1966年～1970年生まれの38歳～40歳）」の、興味深いライフスタイルや消費行動を示している。

例えば、「おしゃれに関心がある」という項目では、若者のおしゃれへの関心が、他の世代に比べてかなり高く、若者は男女ともに「おしゃれを意識している」という結果が出ている。また、「とにかく安く経済的なものを選びたい」という項目では、若者および他の世代のポイントが高かった。この調査結果から、若者の「節約志向の中に、おしゃれ感覚を上手に取り込んでいる」という傾向が考察され、「お金をかけずにおしゃれを楽しむ」ということが若者の消費行動の特徴となっていると

分析されている。²⁸⁾

長期にわたり日本経済が低迷している背景や、「いつ会社が倒産したりリストラになったりするかわからないから貯蓄をしておきたい」という考えもある。社会学者の山田昌弘氏は、著書（『なぜ若者は保守化したのか 希望を奪い続ける日本社会の真実』、朝日新聞出版、2015年）において、「今の若者はお金がなくなることへの不安が大きく、若い人の中で、消費より貯金をする人が増えている」現象を紹介している。考えられる理由として、「将来にわたって好きなモノを買い続けるため」、「一生身体を理想通りに保つため」に、かえって貯金をしなければという意識が高まった結果であるとしている。それが、車や飲食代などの不要不急の消費を控えさせ、若者消費不況といった状況が出現する1つの要因になっていると説明している。²⁹⁾

上述の松田氏のいう「みせびらかし消費」、地域流通経済研究所の調査が示す「お金をかけずにおしゃれを楽しむ傾向」、山田氏のいう「将来にわたって好きなモノを買い続けるために貯金する」といったような事例と、精神科医の和田氏がいう「自分より周囲の目や周囲の嗜好」を重視する「シゾフレ人間」についての論述とは、通じるものがあるといえそうだ。

(4) 強まる「リスク回避」の傾向

社会心理学者の山岸俊男氏と、ハーバード大学の社会学者のメアリー・C・プリントン氏は、共著（『リスクに背を向ける日本人』、講談社、2010年）の中で、「日本人のメンタリティー」という視点から日本社会を考察している。その中で中心となっているのが、日本人の「リスク回避」傾向である。

著書では、「セカンドチャンス」がない日

²⁷⁾ 松田久一『「嫌消費」世代の研究』、東洋経済新報社、2009年。
香山リカ『〈不安な時代〉の精神病理』（電子版）、講談社、2011年。

²⁸⁾ 財団法人・地域流通経済研究所「若者のライフスタイルと消費行動～若者は本当にお金を使わないのか！？～（要約）」、2010年：
http://www.dik.or.jp/pdf/press_0907_main.pdf
(2015年5月4日閲覧)

²⁹⁾ 山田昌弘『なぜ若者は保守化したのか 希望を奪い続ける日本社会の真実』、朝日新聞出版、2015年、45-46頁。

本社会はリスクが大きいので、日本人の多くの人が、転職を考えようとしないうちに、「失敗すると先がないから、思い切って自分で事業を起こすといったようなことを避ける」というように、現在の日本人が、こういった「リスク回避」行動をとる傾向は、米国より顕著であるということが述べられている。該書で紹介されている、2005年から2008年にかけて実施された「世界価値観調査」によると、「自分が冒険やリスクを求めるということに当てはまっていない」と考えている日本人の割合は、他国を引き離して、70%を超えている。³⁰⁾

「海外留学をしない」ということも「リスク回避」の一種であると考えられる。経済協力開発機構 (OECD) の調査 (2013年) によると、大学など高等教育機関に在籍する日本人のうち、海外に留学している学生の割合は、日本は1.0%で、比較できる加盟国33カ国中、「ワースト2位」であった。その調査結果が示すところによると、海外で学ぶ学生は、2005年の6万2853人をピークに年々減少し、2011年には3万8535人にまで減少した。日本人の留学者数の減少傾向について、OECDは報告書の中で、「日本人学生の『内向き』傾向や外国に出るリスクへの恐れを反映している」と分析している。その要因として、「経済状況の悪化によって、留学費用を捻出することが難しくなった」、「就職活動の早期化によって留学を避けるようになった」という問題点も指摘されている。³¹⁾

同様の内容は、新聞記事にも見られる。『時事通信』(2010年12月22日掲載) は、「文部科学省は、2008年に海外留学した日本人は前年比11%減の6万6833人だったと発表した。同省によると、過去最大の減少幅で「不況や就職活動の早期化、学生の内向き志向などが原因

と考えられる」と分析している。」という記事を掲載している。³²⁾

NHK解説委員室の「アジアを読む 若者よ世界で学ぼう～国際化から取り残される日本人～」では、若者の海外留学の減少の要因として、「経済的要因」、「就職活動の早期化」のほかに、以下の要因が示唆されている。1つは「少子化」である。特に18歳人口が減ってきているために、海外に限らず大学進学者そのものが減っている。次に、「留学がキャリアにとってプラスにならないこと」である。一般的に、日本企業は、協調性や調和を重んじる傾向があるため、意見をはっきりと述べることを身に着けた海外留学組は、あまり歓迎されない場合が多いからだとされている。³³⁾

(5)「保障」、「安定」の上での海外留学や海外赴任を好む若者

社会学者の山田昌弘氏は、著書『なぜ若者は保守化するのか』、東洋経済新報社、2009年)において、「リスクに挑戦せず、安全な選択肢のみにしがみつくと若者が増えている」という現象を紹介している。そして、著書『なぜ若者は保守化したのか 希望を奪い続ける日本社会の真実』、朝日新聞出版、2015年)において、「新卒偏重の採用事情が、若者がリスクを取らずに保守的になる大きな要因となっている」と強調している。

現在の日本では、キャリアを積むことが必要な職種は、閉鎖的で安定的である。特に大企業の総合職や公務員は、基本的に「新卒偏重採用」で、社内でトレーニングをし、キャリア・アップしていくシステムを崩していない。「新卒一括採用システム」は、学生にとっては卒業時のみが、自分にとって最も条件がよく、自分の能力を育ててくれる企業に入社できる唯一の機会であるため、それが学生に「新卒というチャンスを逃したら、転落してしまう」という意識を生じさせ、学生の行動に影響を与えていると山田氏は分析してい

30) 山岸 俊男、メアリー・C・ブリントン共著『リスクに背を向ける日本人』、講談社、2010年。

31) 「海外留学者数、加盟国中ワースト2位「内向き」志向が原因? = OECD報告書」、*The Huffington Post* (2013年07月15日 掲載) : <http://www.huffingtonpost.jp/news/chihihosei/> (2015年5月4日閲覧)

32) 「日本人の海外留学、11%減=過去最大の減少幅一文科省」、『時事通信』(2010年12月22日掲載)

33) NHK解説委員室「若者よ世界で学ぼう～国際化から取り残される日本人～」(2010年08月03日掲載) : <http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/600/56037.html> (2015年5月4日閲覧)

る。また、山田氏は、日本生産性本部の2008年の新入社員に対する調査結果を提示し、「今の会社に一生勤めようと思っている」とする回答が、調査開始以来最高（47.1%）になったことは理解できると述べている。³⁴⁾

それを裏付けるかのような、興味深い調査結果がある。慶應義塾大学の小鞠誠人氏の「若者の「内向き志向論」に関する考察 - 「コンサマトリー化」する若者たちと「道具化」する海外経験」³⁵⁾（2011年）における考察である。そこでは、留学生数の減少現象を示したOECDの調査結果について、小鞠氏は、以下のような考察を行っている。

OECDが実施した留学生の動向調査には、「交換留学生」は含まれていないため、小鞠氏は、佐藤邦明氏の「グローバル化人材育成の目指すべき姿」（『日本貿易会月報』695号）³⁶⁾から、「学生交流に関する大学協定などに基づく日本人学生の海外留学生数（交換留学）」の数字（2001年～2008年の推移）を引用して、異なる現象を示している。OECDの調査では、留学生は減少の一途を辿っているのに対して、「グローバル化人材育成の目指すべき姿」の調査では、「交換留学生」の数は、2001年から増加し続けており、2004年～2006年にかけては、年間約3,000人の増加がみられるという現象を示している。

小鞠氏はまた、産業能率大学が実施した「第4回新入社員のグローバル意識調査」（2010年）の調査結果を提示し、新入社員の中で、「海外で働きたいと思わない」および「どんな国・地域でも働きたい」との回答がともに、過去10年間の間に増加傾向にあるということを指摘している。一方、「国・地域によっては働きたい」は減少していることから、若者の海外志向は「二極化」していると、小鞠氏は説明

している。

小鞠氏は同時に、公益財団法人日本生産性本部が実施した「2011年度新入社員春の意識調査」（2011年）の調査結果を示し、「海外勤務のチャンスがあれば応じたい」と思う回答者が、男女ともに半数を超えていることを示し、若者の「内向き志向」が強調するほどの低い水準ではないことを指摘している。こういった数字を踏まえて、小鞠氏は、「日本の留学生数は年々急減している」、「近年の若者は海外勤務に消極的である」という主張は、一部のデータに過度に依拠した一面的な見方であるということを示唆しているのである。

筆者は、「大学協定に基づく交換留学（交換留学）」、あるいは、「会社から派遣されての海外赴任」の増加傾向は、日本人の「リスク回避」志向と、大きく関係していると考えている。両者はともに、自らの所属先が「保障」されている上での海外渡航である。学生の交換留学の場合は、大学が正式に認めてくれた形での留学であるため、留学後復学して、「新卒」という安定した条件で就職活動に臨むことができる。会社員の海外勤務の場合は、帰国後、受け入れてくれる所属先があり、一から新しくキャリアを積む必要はない。むしろ、海外勤務がキャリアとして評価されることにもなる。それらは、一種の「保障」、「安定」、「低リスク」の上での海外渡航であるといえる。そういう状況の下でなら、若者は海外に行きたいと積極的に思えるのだろう。現在の若者は、「海外に興味がないわけではなく、海外に興味があるものの、リスクを冒してまでは海外には行こうと考えていない」と考えるべきであろう。

6. むすびにかえて

上述のように、社会学者の山田昌弘氏は、リスクに挑戦しようとしないう若者の増加の要因の1つに、現在の「就職システム」のあり方や「教育投資」の問題が存在するとした。

³⁷⁾ 特に、「新卒一括採用」で正社員のルートか

³⁴⁾ 山田昌弘『なぜ若者は保守化したのか 希望を奪い続ける日本社会の真実』、朝日新聞出版、2015年、49-50頁。

³⁵⁾ 小鞠誠人「若者の「内向き志向論」に関する考察 - 「コンサマトリー化」する若者たちと「道具化」する海外経験」（慶應義塾大学法学部政治学科卒業論文）、2011年。

³⁶⁾ 佐藤邦明「グローバル化人材育成の目指すべき姿」、『日本貿易会月報』695号、34頁。

³⁷⁾ 山田昌弘『なぜ日本は若者に冷酷なのか』、東洋経済新報社、2013年、77頁。

ら漏れてしまうと、キャリア・アップは望めず、低賃金で不安定な職に就かざるを得ないといった状況が定着してしまう。その結果、近年顕著になってきている「非正規雇用」や「収入が上らない正社員」の増加することになる。そういう人たちが結婚しても、まともな生活ができないという状況が、「未婚化」を加速させていると、山田氏は断言している。

38)

就職での「セカンドチャンス」がないという状況を、よいものに変えるためには、「就職の機会を新卒のみに集中させるような従来のシステムを変えていくこと」、「学校と就職の間をつなぐ新しいシステムを作ること」、「若者が少々リスクを冒して転職や起業を試みるのが無駄にならないようなシステムを構築すること」が必要となってくる。つまり、「多様性よりも、集団性や協調性を重視する従来の社会構造」を変えていくことが必要になってくるのである。

実際に、徐々にではあるが、若者の海外留学離れの状況を受けて、若者たちの留学を後押しする動きが広がっている。「海外留学者数、加盟國中ワースト2位「内向き」志向が原因? = OECD報告書」記事の中で、紹介されているものとしては、1つは、「日本再興戦略-JAPAN is BACK-」政策である。それには、2020年までに、日本人留学生を6万人(2010年)から12万人へ倍増させるという目標値が盛り込まれている。また、「就職活動期間を削る不安が、留学をためらわせる一因」とみている経団連は、政府の要請を受け、2016年4月入社の採用から、大学生の就職活動の解禁時期を3年生の3月に繰り下げる指針を定めると決定している。また、海外留学を容易にするために、東京大学は2015年度末までに4学期制の導入方針を決めている。該記事では、アン

ドレア・シュライヒャー OECD教育局次長の「奨学金などの資金的な援助も必要だが、海外での経験や学業がしっかりと評価される制度も必要だ」という声も紹介されている。³⁹⁾

山田氏は、「人口減少社会の中で、若者の交際率をどのようにアップさせるかというのも、1つの政策課題になってもよい」という提言している。山田氏のいうように「社会全体の意識の改革」が、若年層を支援することになり、それは、日本の未来のために必要な課題なのである。

とはいえ、社会全体の構造を見直すことを目的とする政策課題は、一朝一夕にして実現することは容易ではない。非常に有効だと思われる提言であっても、複雑化された現代社会では、多方面からのアプローチがないと実施が難しいのではないだろうか。山田氏は、著書で「日本社会の将来を論じる際に、経済学と家族社会学のコラボレーションが必要になっている。なぜなら、日本において、家族システムと経済システムが同時に相互に関連しながら大きく変化しているからである」と述べて、「経済学と家族社会学のコラボレーション」の必要性を強調している。⁴⁰⁾ 精神科医の香山リカ氏も、著書(『〈不安な時代〉の精神病理』、講談社、2011年)の中で、「精神医学や精神医療は、現実の世界と切り離されたところに存在するわけではない。それはあくまでのこの社会における「人間の営み」のひとつにすぎず、当然のように時代状況や社会情勢の流れの中にあるものだ」と述べて、「時代状況や社会情勢とリンクさせながら、精神医学と精神医療を考えていなければならない」と述べている。

単一の領域で対策を練るというのでは不十分であり、様々な領域の専門家が情報を提供し合いながら、解決策、対策を議論することが肝要になってくるのである。これまで、主に社会科学の視点で多く取り上げられてきた「消極化」する若年男性についての問題を、「社会科学」からのアプローチのみならず、「大脳

38) 山田昌弘『なぜ若者は保守化したのか 希望を奪い続ける日本社会の真実』、朝日新聞出版、2015年、49頁、68頁。

39) 「海外留学者数、加盟國中ワースト2位「内向き」志向が原因? = OECD報告書」、*The Huffington Post* (2013年07月15日掲載): <http://www.huffingtonpost.jp/news/chihososei/> (2015年5月4日閲覧)

40) 山田昌弘『なぜ日本は若者に冷酷なのか』、東洋経済新報社、2013年、239頁。

生理学」、「免疫学」、「精神医学」、「心理学」、「経済学」などの多方面の研究結果や視点を交えながら、総合的に見据えていく必要があると、筆者は考えている。これまで各領域で行われてきた研究をつなぎ合わせていく作業をすることや、山田氏や香山氏の提案するように、さまざまな研究領域がコラボレーションをする必要がより一層必要になるだろう。

社会全体の構造を見直すことを念頭に置きながら、各領域の専門家が協働できる機会を多く設けて、総合的な議論がしやすい環境を作ることを優先する。そして、社会全体に対しては、厚労省や文科省が主導して、地方自治体、保健センター、教育機関などを通して、「大脳生理学に関する知識」、「ゲーム脳の危険性」、「幼少時からのコミュニケーションの大切さ」、「免疫についての知識」、「食生活の知識」などを軸にした啓発活動を、同時進行で、できるだけ早い段階から、積極的に展開していくことも重要である。

本研究ノートは、若年男性が「消極化」する傾向にあるという前提のもとで、その要因として考えられるものを、いくつかの異なる領域による研究を通して考察することを試みたものである。ただ、今回取り上げた領域および研究内容は、数多くある研究領域の中のほんの一部分にすぎない。本来ならば、こういった現象や対策を述べる前に、実際に「消極化」する若年男性が本当に増えているのかどうか、という点を丁寧に検証していく必要があるだろう。その上で、その数字を見据えながら、更に具体的な提言をするべきである。また、上述の数点の研究だけではなく、更に異なる領域のより多くの研究をつなぎ合わせていく必要がある。本研究ノートでは、そういった作業を実施することができず、それを大きな反省点としている。それについては今後の課題とし、今回取り上げた「大脳生理学」、「免疫学」、「精神医学」、「心理学」のみならず、その他の領域も含めた研究事例を更に集めて、今後、より良い提案を行っていきたいと考えている。

謝辞：この研究ノートを作成するにあたり、

中央大学の山田昌弘教授から有用なコメントをいただきました。ここに合わせて感謝申し上げます。

<参考文献> (50音順)

安保徹『人がガンになるたった2つの条件』(電子版)、講談社、2012年。

有田秀穂『セロトニン欠乏脳 キレル脳・鬱の脳をきたえ直す』、日本放送出版協会、2003年。

有田秀穂『「脳の疲れ」がとれる生活術』(電子版)、PHP研究所、2012年。

池岡清光他「草食系男子のホルモン動態」、『日本医事新報』4659号、日本医事新報社、2013年8月。

生田哲『食べ物を変えれば脳が変わる』、PHP研究所、2008年、208頁。

NHK解説委員室「若者よ世界で学ぼう～国際化から取り残される日本人～」(2010年08月03日掲載)：<http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/600/56037.html> (2015年5月4日閲覧)

大島清『できる女とダメな男の脳習慣』、角川書店、2007年。

「海外留学者数、加盟国中ワースト2位「内向き」志向が原因? =OECD報告書」、The Huffington Post (2013年07月15日掲載)：<http://www.huffingtonpost.jp/news/chihososei/> (2015年5月4日閲覧)

加藤諦三『非社会性の心理学』(電子版)、角川書店、2009年。

(株)JTB総合研究所「減少する日本人海外旅行者・・・変化しつつある海外旅行の動機やその価値観 - JTBレポート2010年版の発行に際して -」：<http://www.tourism.jp/column-opinion/2010/07/jtb-report/> (2015年5月4日閲覧)

(株)JTB総合研究所「若者の生活と旅行意識調査」：http://www.tourism.jp/wp/wp-content/uploads/2012/12/research_121212_youth.pdf (2015年5月4日閲覧)

香山リカ『〈不安な時代〉の精神病理』(電子版)、講談社、2011年。

小鞠誠人「若者の「内向き志向論」に関する考察 - 「コンサマトリー化」する若者たち

- と「道具化」する海外経験」(慶應義塾大学法学部政治学科卒業論文)、2011年。
- 財団法人・地域流通経済研究所「若者のライフスタイルと消費行動～若者は本当にお金を使わないのか！？～(要約)」、2010年：
http://www.dik.or.jp/pdf/press_0907_main.pdf
(2015年5月4日閲覧)
- 佐藤邦明「グローバル化人材育成の目指すべき姿」、『日本貿易会月報』695号、34頁。
- 谷本菜穂『恋愛の社会学』、蒼弓社、2008年。
「日本人の海外留学、11%減＝過去最大の減少幅－文科省」、『時事通信』(2010年12月22日掲載)
- ベネッセ教育研究開発センター「第1回子ども生活実態基本調査報告書」、『研究書報』vol.33、2005年。
- 星野仁彦『「空気が読めない」という病』、KKベストセラーズ、2011年。
- 松田久一『「嫌消費」世代の研究』、東洋経済新報社、2009年。
- 森昭雄『ゲーム脳の恐怖』、日本放送出版協会、2002年。
- 森岡正博「「草食系男子」の現象学的考察」、The Review of Life Studies. 2011, p.13.
(<http://hdl.handle.net/10466/11851>) (2015年5月4日閲覧)
- 山岸 俊男、メアリー C・ブリントン共著『リスクに背を向ける日本人』、講談社、2010年。
- 山田昌弘『なぜ日本は若者に冷酷なのか』、東洋経済新報社、2013年。
- 山田昌弘『なぜ若者は保守化したのか 希望を奪い続ける日本社会の真実』、朝日新聞出版、2015年。
- 和田秀樹『「人を動かす」心理学』(電子版)、毎日新聞社、2013年。
- 山岸 俊男、メアリー C・ブリントン共著『リスクに背を向ける日本人』、講談社、2010年。
「「恋愛に無関心」って本音？」、『毎日新聞』(2015年02月04日東京夕刊掲載)：<http://mainichi.jp/shimen/news/20150204dde012040002000c.html> (2015年5月4日閲覧)